

新しい軸の時代を迎えて

島崎 英夫 (大阪教育大学)

昨年秋とこの冬、二度ギリシャに行ってきました。仕事柄、学校を訪問することが主な目的ですが、ギリシャの学校はほとんど午前中で授業が終わってしまいます。午後は近くにある遺跡や博物館をたずねます。アテネでも、クレタ島でも、驚くのはどの博物館にも出土した貨幣がたくさん展示されていることです。古代、最初に貨幣経済が発達した小アジア（現トルコ）のミレトスなどに住むギリシャ人の間から自然哲学が起こってきた、そう説くのはカール・ヤスパースです。

ヤスパースは、紀元前500（広くとって800～300）年頃を「軸の時代」と呼びました。ギリシャはもちろん、イランのゾロアスター、ユダヤ思想、インドの釈迦、中国の諸子百家などがこの時代に一斉に登場します。神話の時代を離れて、人間とは何かを意識するようになった人たちが「歴史の軸となる転換」を起こした時代です。では、この時代になぜこうした転換が起こったのでしょうか。貨幣の流通に関わります。なぜ、貨幣が流通するのか、たくさんの人々が旅をしたからです。軸の時代に「人間はいかに生きるべきか」を考え始めた人たちは、みな「旅する人」でした。この人たちは、生まれ育った共同体を出て、①世界を外部から見る視線を持ちます。自分にとっての「当たり前」が通じない社会を旅して、②「自明性」の解体を体験します。根無し草のような、③根拠のない感覚と根拠を求めようとする探究心を起こします。そして、④異質な人やものとの共存という切実な課題を負います。異なる立場の者の間に共通性はないのかを探って、⑤普遍化や一般化を考えます。そこから⑥メタ化、審級化、累乗化という形而上学、つまり哲学が起こってきます。旅にあって肌で感じる世界の無限性が、⑦無限という恐怖、虚無の克服という課題を生み、それらを解決しようとした人々が大いに考えた時代だったのです。そこから生まれた哲学や思想が、今日まで連続と受け継がれてきました。

今、新しい、第二の「軸の時代」に入ってきたのではないのでしょうか？ 紀元前500年代の人々は、旅することで世界の大きさや無限性、各地の異質さを感じました。しかし、今や地球上のわたしたちを捉えている感情は、地球の狭さ、有限性です。コロナ・ウィルスによる新型肺炎の脅威は、地球の狭さと人々の交流の頻繁さを感じさせます。温暖化をはじめとする地球環境の現状も、この世界の「無限」ではなく、「有限」をわたしたちに反省させます。この有限性を正視するところから、近代を超える「新しい軸の時代」の思想の問いが始まります。2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ（SDGs）」という国際目標もそうです。十七ある目標をここで詳しく述べる紙幅はありませんが、これらの目標を達成して、持続可能な世界をみんなで作るためにも、紀元前500年の「軸の時代」を生きた人たちの①から⑦を体験し直す必要があると思います。ただし、⑦の「無限性」を「有限性」と書き換えて。

思索する旅が必要です。若い者には旅をさせよ、という古人の知恵も持続させたいと思います。